日本国際理解教育学会会報

JAPAN ASSOCIATION FOR INTERNATIONAL EDUCATION NEWSLETTER

Vol. 34　2008（平成 20 年度）No. 2　平成 21 年 3 月 31 日　編集発行：日本国際理解教育学会事務局

〒 161-8539　東京都新宿区中落合 4-31-1 目白大学内　TEL：03-5996-3166　FAX：03-5996-3125
E-mail：kokusai@mejiro.ac.jp　Website：http://www.kokusai.com

目　次

巻頭の言葉　学会長挨拶 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
第19回大会実行委員長挨拶 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
第19回大会のご案内 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
第19回大会シンポジウム ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
第19回大会特定課題研究 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
大会自由研究の発表者と題名 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
韓国国際理解教育学会大会の報告 ・・・・・・・・・・・・・・・ 7
国際理解教育学会・東京研修会の報告 ・・・・・・・・・・・・ 8
国際理解教育学会・奈良研修会の報告 ・・・・・・・・・・・・ 9
2008年度理事会（各委員会等）報告 ・・・・・・・・・・・・・10
国際理解教育の新潮流 奈良での取組み ・・・・・・・・・・・・11
会員だより ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
お知らせ（これからの行事／イベント案内）・・・・・・・・・・15
事務局通信・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16

巻頭の言葉

ちぢみ思考の打破
～第 19 回大会に期待すること～

学会長　多田　孝志

世界的な経済不況の影響を受けて、国際貿易が縮小し、各種産業の生産量が激減し、大量解雇が行われています。こうした世相の中で、危惧されるのは、「ちぢみ思考」の蔓延です。社会全体が伸びやかさを欠き、活力を低下させてきています。このまま社会が閉塞し、人々の苛立ちが増大すれば、社会不安が広がり、犯罪の多発、さらには紛争の勃発へと傾斜していく恐れを感じます。

問題は、明日の社会の担い手を育成する教育もまた、ちぢみ思考に支配されていることです。小・中・高校を訪問してみますと、先生方の勤務時間の長さ、雑務の多さに驚かされます。この傾向は大学にも波及してきています。教師から子どもと対する時間、教材研究の時間が奪われている現状に怒りさえ覚えます。

何より気にかかるのは教師たちから精神的余裕が失われてきていることです。競争・評価・説明責任などの市場原理の積極的な導入により，自由競争推進の美名の下で、教育格差が進行し、本来精神的自由が遵守されるべき教育の自主性・自律性が奪われ、管理・統制の強化へと逆行しているようにみえます。こうした状況は、教師から伸びやかさを奪い、教師を疲弊させ、絶望感さえもたらし、余計なことはするまいとのちぢみ思考に追いやっているように思えてなりません。

一方、子どもたちにもまた悲しむべき状況が進行しています。自己肯定感を喪失し、人間関係に苦手意識をもつ傾向が顕著となってきています。仲間はずれを恐れ、表面的には仲良く振る舞うが、実は脆い人間関係が支配する教室の雰囲気を、知人の若手教師は「静かな崩壊が始まっている」と表現しました。この言葉の意味を深く考えると、慄然たる思いがします。

わたしはこうした時代であるからこそ、国際理解教育が重視されなければならないと考えます。国際理解教育は希望ある未来の創造を使命としている教育です。この教育を推進することは、教師および教育関係者に、教育の主体的な推進者であることへの誇りを復権させると信じています。国際理解教育の学習方法では、子どもたちのさまざまな発見・気づき、考え方が生かされ、答えいろいろの非定型型学習が重視されます。また対話場面の設定や多様な教育資源の活用が学習の効果を高めます。

こうした教育実践を創造するには、教師・教育関係者の伸びやかな発想、広い視野や、教育に関する専門性が必須です。こう考えたとき、国際理解教育は、その担い手たちに、誇りをよみがえらせ、子どもたちには、前向きに生きる力を高める教育でもあると確信します。

本学会では、2009 年 6 月に第 19 回大会（同志社女子大学）を開催します。特定課題には「ことば・音と国際理解教育」を掲げています。この大会では、参加者が国際理解教育の理論・実践について相互啓発できる先駆的な研究・実践研究の報告が予定されています。ぜひ大会にご参加ください。そして多くの仲間と出会い、ちぢみ思考を打破し、明日の教育推進への勇気と自信を高めていってください。

第 19 回大会実行委員長　挨拶

京都大会へのお誘い

同志社女子大学　藤原孝章

日本国際理解教育学会第 19 回研究大会（同志社女子大学）が、6 月 13 日（土）・14 日（日）の両日に同志社女子大学（京田辺キャンパス）を会場に開催されることになりました。本大会の実施にあたっては、同志社女子大学および地元の京田辺市、京田辺市教育委員会などからご後援をいただいています。

会場となる京田辺市は、奈良と京都の中間地帯に位置する京都府南部の中心地です。古くは継体・欽明朝（古墳時代）ゆかりの綴喜宮（伝承）や「隼人の舞」で有名な薩摩大隅国から移り住んだ大住地区（奈良時代）、「一休さん」（禅僧一休宗純）の一休寺（室町時代）も近くにあります。山城国一揆の基盤となった惣村共同体がこの地域の古い農村には残っていますが、現在は、京都や大阪のベッドタウンになっています。また、同志社大学・同志社女子大学・同志社国際中・高等学校の広大なキャンパスは、隣接する精華町・木津川市とともに、国立国会図書館（関西分館）や企業の研究機関・施設が広がる関西学術研究都市の一画として、京田辺市に位置しています。交通の便も，京都駅、奈良駅、京橋駅（大阪市）から各 40 分ほどで移動でき、たいへん便利ですので、ぜひご参加ください。

なお、宿泊施設は、過日のご案内のように地元のウエルサンピア京都（京都厚生年金保養センター　http://www.kjp.or.jp/hp_48/ ）しかございませんので、お早めに予約していただくか、京都、奈良、大阪駅周辺でご予約ください。

同志社女子大学のキャンパス

日本国際理解教育学会第 19 回研究大会のご案内

豊かな文化と歴史の町、京田辺へようこそ

日本国際理解教育学会第 19 回研究大会実行委員会

日本国際理解教育学会第 19 回研究大会（京都大会）の概要について、ご案内致します。詳細については、過日お送り致しました大会要項「日本国際理解教育学会第 19 回研究大会（同志社女子大学）のご案内」をご覧下さい。（事務局 HP 上にも掲載：http://www.kokusairikai.com）

1. 研究大会日程：2009 年 6 月 13 日（土）・14 日（日）

プレ・イベント　6月12日（金）			
講演会「ユネスコ･ESDとシュタイナー教育」（15:00-15:45） 京田辺シュタイナー学校現地見学会（16:00-17:00） 理事会（17:30-19:00、同志社女子大学）			
大会1日目　6月13日（土）		大会2日目　6月14日（日）	
9:00	受付開始	9:00	受付開始
9:30	自由研究発表	9:30	自由研究発表
12:00	昼食	12:00	昼食
13:00	総会	13:00	特定課題研究
14:00	シンポジウム	16:00	大会終了
17:30	懇親会〈送迎バス〉		

2. 会場：同志社女子大学（京田辺キャンパス）

（〒 610-0395 京田辺市興戸　同志社女子大学現代社会学部・現代こども学科）

3. 同志社女子大学（京田辺キャンパス）への交通

(1) 京都方面からは近鉄が便利です。新幹線京都駅と隣接する近鉄京都駅から京都線で奈良・天理・橿原神宮行の急行で新田辺駅へ、普通に乗り換えて一駅の近鉄興戸駅で下車（31 分、390 円）。近鉄興戸駅から徒歩12 分。

(2) 奈良方面からは同じく近鉄が便利です。西大寺駅から京都線で京都行普通で近鉄興戸駅へ（21 分）。

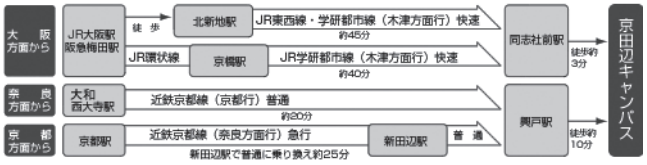
(3) 大阪方面からはJR が便利です。北新地や京橋駅からJR 学研都市線で直通です。京橋駅から木津行もしくは同志社前行快速で京田辺駅へ、車両を切り離して前 4 両で同志社前駅へ（40 分、570 円）、同志社前駅から徒歩7 分。JR 大阪駅から京橋までは環状線で7 分です。

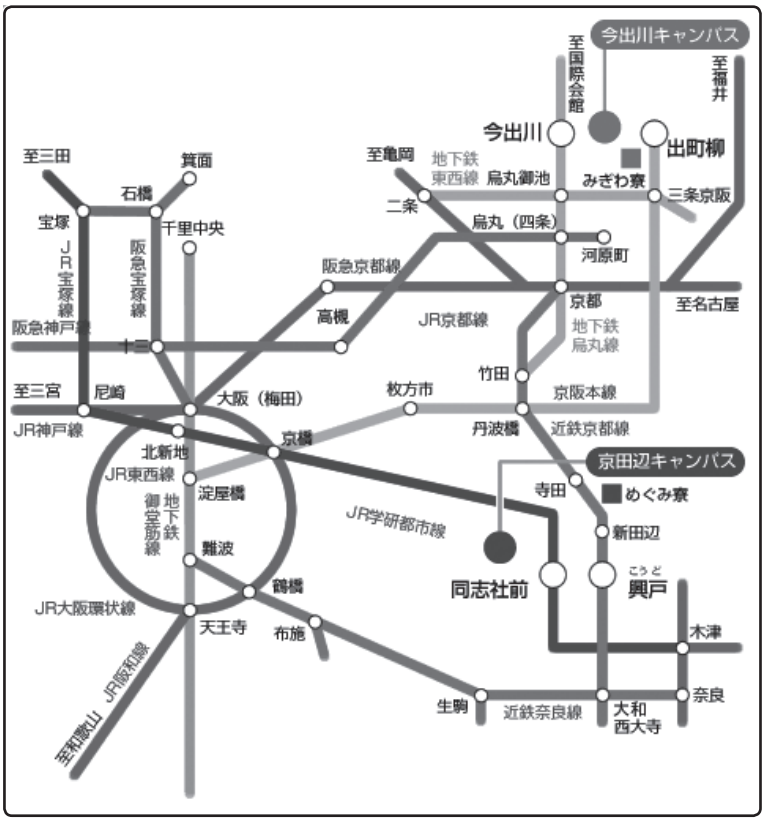
(4) お急ぎの方は、新田辺駅（近鉄）、京田辺駅(JR) からタクシーをご利用ください（同志社女子大学北門前まで約10 分、約1200 円、相乗りが便利）。

(5) バスの場合は、奈良交通バス案内をご覧ください。新田辺・三山木発。ただし、土・日ゆえバスの本数は少ないですのでご注意下さい）。

http://jikoku.narakotsu.co.jp/form/asp/ejhr0060.asp

(6) 大学構内の外来用駐車場が手狭なため、自家用車でのご入構はご遠慮下さいますよう、お願い致します。





同志社女子大学（京田辺キャンパス）へのアクセス地図

4. 大会参加費、懇親会費について

(1) 大会参加費（事前振り込み）：一般会員3000 円、学生会員2000 円（当日：一般、学生会員、非会員4000 円）

(2) 懇親会費：5000 円

(3) 昼食：両日とも生協食堂をご利用ください。麺類と丼物に限定して販売しております。弁当は販売しておりません。大学周辺には、JR 同志社前以外にコンビニ、喫茶店などまったくありませんのでご注意ください。

5. 懇親会について

2009 年6 月13 日（土）17：30 より、ウエルサンピア京都にて開催します（大学から送迎バスがでます）。

6. プレ・イベント（6 月 12 日金曜）

当初の大会案内にはなかったのですが、同志社女子大学正門（右図）に隣接する京田辺シュタイナー学校（NPO 法人）のご厚意とご協力をえて、大会前日の6 月12 日金曜日にプレ・イベントとして、ESD とシュタイナー教育にかかわる講演会と現地見学会を開催することにいたしました。

・講演会：大阪府立大学教授・吉田敦彦氏「ユネスコ・ＥＳＤとシュタイナー教育―京田辺シュタイナー学校の事例より」（会場：同志社女子大学、15:00-15:45）

・現地見学会：京田辺シュタイナー学校（16:00-17:00、参加者は20 名まで）

なお、講演会および現地見学会の申込等は、大会事務局（同志社女子大学藤原孝章研究室）までメールでお願いします。

7. シンポジウム：テーマ「国際理解教育と『習得・活用・探究・参画』に結びつく力―ワークショップ、参加型学習がめざすものー」

今回、本学会初の試みで、「ワークショップ・オン・ワークショップ」ともいうべき企画です。シンポジストの一方的な問題提起に終わりがちな既存のシンポジウムに代えて、国際理解教育におけるワークショップや参加型学習が知識の習得・活用、課題の追究、社会への参画とどのように結びつくのか、結びつけようとすればそこにどんな課題があるのかを、議論し、検討したいと思います。3 つのワークショップを参加者にも体験してもらい、全体でふりかえる参加型のシンポジウムにしたいと考えています。国際理解教育が、生きる力の育成を掲げる日本の教育シーンにどれだけせまるか、広く議論できることを期待しています。

8. 特定課題研究：テーマ「ことばと国際理解教育」

小学校に英語活動がその目的や方法に関して丁寧な議論のないまま導入されていく現状や、多言語・多文化化が進展する地域で外国につながる人たちの生活言語としての日本語と母語への対応などの状況を背景に、従来の言語観を捉えなおし、ことばと文化の関係、またことばそのものに内在する身体性や音の力などにも注視し、国際理解教育の多様性や実践の可能性を探ろうとします。特定課題は、学会の研究委員会が、研究計画をもって取り組んでいるテーマ課題です。前回は「世界遺産教育」、次回は「シティズンシップ教育」（2010 年）で、これらの研究成果は、学会紀要の特集論文としても編集されます。

9. 参加費・懇親会費・弁当代等の振り込み先

・口座記号番号：00900-7-226039

・加入者名　日本国際理解教育学会第19 回大会

10. その他

抄録原稿の提出締切りは、4 月17 日（金）郵送必着です。必着でない場合は、大会運営上、発表辞退と見なしますので、くれぐれも早めにご準備、ご発送下さい。また、大会参加費等の振り込みは速やかにお願い致します（最終期限として、5 月29 日を設定させて頂きます）。期日（2009 年5 月29 日）を過ぎて振り込みなされた場合には、必ず「振り込み受領書」などの振り込みを証明できるものを受付でご提示下さい。振り込みが確認できない場合は、当日大会参加費を頂くこともありますので、ご了承下さい。

（文責・藤原孝章）

京田辺シュタイナー学校の周辺地図

国際理解教育と『習得・活用・探究・参画』に結びつく力
ーワークショップ、参加型学習がめざすものー

同志社女子大学　藤原　孝章

今回のシンポジウムは、学会では初めての試みです。いわば「ワークショップ・オン・ワークショップ」ともいうべき企画です。大会初日午後（6月13日14時～17時）、同志社女子大学現代社会学部・現代こども学科において開催します。会員のみならず市民・学生にも一般公開します。

シンポジストの一方的な問題提起に終わりがちな既存のシンポジウムに代えて、テーマを「国際理解教育と『習得・活用・探究・参画』に結びつく力ーワークショップ、参加型学習がめざすものー」とし、国際理解教育におけるワークショップや参加型学習が、新しい学習指導要領（2008年告示）が掲げる知識の習得・活用、課題の追究、社会への参画とどのように結びつくのか、結びつけようとすればそこにどんな課題があるのかを、議論し、検討したいと思います。

そのために、3つのワークショップを用意し、参加者にも実際に体験してもらい、その後に全体でふりかえる参加型シンポジウムにしたいと考えています。はじめての試みでどこまでできるか未知数ですが、グローバルな課題と教育実践をつなげようとする国際理解教育が、活用力や思考力、判断力などのPISA型学力と社会形成力・生きる力との効果的な接合を図ろうとする日本の教育シーンにどれだけ迫れるか、広く議論できることを期待したいと考えています。

○趣旨説明・司会：藤原孝章〈同志社女子大学〉
○指定討論者：中山京子（京都ノートルダム女子大学、実践研究の立場から）大津和子（北海道教育大学、メタ的な立場から）
○シンポジスト＆ファシリテーター：
・ワークショップA「フードマイレージ買物ゲームで何が学べるか？」松井克行（大阪府立三島高等学校）・林美帆〔(財）公害地域再生センター（あおぞら財団)〕

満開の桜が美しい並木道

緑におおわれた美しいキャンパス

・ワークショップB「「ひとかけらのチョコレートから」織田雪江（同志社中学校）
・ワークショップC「スタディツアーが生徒に与える影響—気づきと変化（行動）」山田正人（大阪府立松原高等学校）

ワークショップを取り入れた参加型学習は、この10年間に、国際理解に関わる教育に多く導入されてきました。従来の知識中心主義、教師中心主義からの脱却という点では大きな成果がありましたが、それらが単なる体験に終わったり、「誘導」のための手段であったりと短所も指摘されてきました。いいかえれば、参加型学習でどんな学力を育てるのか、スキルや技法におわらない知識の活用や社会参加への力となるのは何なのか。ワークショップや参加型学習をくみこんだ学習の文脈づくりの課題は、依然として残されたままだと考えます。

一方、「習得、活用、探究、参画」といった新しい学習指導要領の文言は、抽象的な言辞として独り歩きする傾向もあります。ワークショップを取り入れた参加型学習は、このような抽象性を具体性にかえていく状況的な学習を提供するものとして期待されるといえます。

世界的な規模で起きている経済的な変動やグローバルな規模での相互依存と持続可能な社会への関心を、当事者性のある学びの文脈として創り出していくことは可能なのか、広く議論できることを期待します。

最後に、この度、チェレンジングなシンポジウムにおいて、大津和子、中山京子の両氏には指定討論者として、松井克行、林美帆、織田雪江、山田正人の方々にはシンポジストおよびワークショップのファシリテーターを引き受けていただきました。山田正人氏のワークショップでは、松原高校の生徒さんや卒業生の皆さんも参加してくださいました。皆様のご協力に感謝いたします。

特定課題研究

ことばと国際理解教育

早稲田大学　山西　優二

特定課題研究「ことばと国際理解教育」の現時点（２月末日）での進捗状況、特に研究の趣旨および２００９年度に予定されている研究日程・研究内容について報告する。なお６月の第１９回大会での登壇者については現在調整中である。

＜研究の趣旨＞

この研究プロジェクトを立ち上げた背景には、小学校に英語活動がその目的や方法に関して丁寧な議論のないまま導入されようとしていること、また地域では多言語・多文化化が進展する中で、外国につながる人たちにとっての生活言語としての日本語と母語への対応のあり方が問われていること、さらには世界ではグローバル化などの影響のもと少数言語が急激にその数を減らしつつあることなど、ことばを取り巻く現場の問題状況に対して、学会もしくは研究会として何らかの視点や方策を示すことが必要であるとの思いがある。

そのような思いを背景に、この課題研究「ことばと国際理解教育」では、多言語が互いに交錯し合う今日的状況の中で、従来の言語観を捉えなおし、ことばと文化の関係、またことばそのものに内在する身体性や音の力などにも注視し、改めて「ことばと国際理解教育」の関連の多様性や実践の可能性を明らかにすることを基本的なねらいとしている。

＜研究予定＞

４月 19 日（日）（13：30 ～ 16：30　於：早稲田大学国際会議場第１会議室）に予定されているオープンフォーラムでは、「ことばの豊饒性に触れるー音･身体･学びー」をテーマに、内田樹氏（神戸女学院大学教授）を基調講演講師としてお招きし、ことばそのもの、そしてことばと学びの関係を捉えなおすと共に、第２部では、ことばと国際理解教育の関連性についても協議することを予定している。

６月の学会での課題研究報告では、研究会のメンバーから、オープンフォーラムでの協議を踏まえつつ、「ことばと国際理解教育」の関連やその多様性について、英語教育、日本語教育など、それぞれの研究・実践の立場から研究成果を報告する。なお６月以降の研究会では、大会での報告を踏まえつつ、ことばを題材とした多様な国際理解教育実践の可能性と課題についてさらに検討を進める予定である。

同志社女子大のシンボル、新島講堂

大会自由研究発表に 67 題目がエントリー

日本国際理解教育学会第 19 回大会自由研究での発表を募集しましたところ、期日締切りまでに 67 題目の発表申し込みがありました。以下に、発表者氏名（所属）と発表題目を掲載致しますので、ご覧下さい（掲載の順番は発表申し込みの受付順です）。また、韓国からも７件の発表申し込みがありました。

自由研究の発表者と題目

1. 辻　良隆（大阪市立南高校）　高校生のためのアフリカ開発経済学テキストを作成して-WHE 授業実践の中で-
2. 山本勝治（東京学芸大学附属国際中等教育学校）　帰国生の特性を活かした世界史教育
3. 齋藤眞宏（旭川大学）　現場実習を通じた教師観の発展：ある韓国人留学生の場合
4. 南美佐江（奈良女子大学附属中等教育学校）　持続可能な英語力の育成- 高校生国際会議の実践を通して-
5. 中和　悠（広島大学大学院）　国際理解教育における外部講師の役割-JICA 国際協力出前講座を事例として-
6. 浅野博子（鳥取県公立学校）　他者理解と自己理解を深める国際理解教育の単元開発
7. 高橋順一（桜美林大学）　クジラを通して世界を見つめた総合的な学習の時間の実践
8. 方　政雄（兵庫県立湊川高等学校）「公立学校における外国籍教員の現状と課題」- 多様性を認めあう国際性豊かな学校をめざして-
9. 鹿野敬文（福岡県立福岡高校）　アイヌの民族自決権に関するディベート
10. 柴田政子（筑波大学）　博物館における歴史教育- 展示と過去の再構築-

11. 孫　美幸（立命館大学大学院）　インドネシアの民族と文化の多様性をテーマにした多文化共生教育
12. 植木節子（千葉大学）　発展的な文化交流をめざした授業の研究
13. 松井克行（大阪府立三島高校）　日米教員の協同による高校学校公民科の授業開発と実践報告- 単元「かつての敵との和解は可能か？」の場合-
14. 廣内裕子（園田学園大学）　現代の日本人の若者の対人距離についての一考察- 近接学の立場から-
15. 福山文子（海外日系人協会）　ペアレントクラシーへの転換がもたらすもの- 外国人児童・生徒の現状を手掛かりとして-
16. 笠井正隆（関西外国語大学短期大学部）　地球市民の資質に関する認識調査- 短大英語学習者の視点から-
17. 今井久枝（国際交流基金関西国際センター）「協働・創造」を取り入れた異文化間交流の試み- 小学生と留学生を対象としたワークショップの実践より-
18. 木村慶太（立命館守山中・高校）　国際理解教育におけるICT の活用- デジタル紙芝居の作成と日韓交流-
19. 小松太郎（九州大学）　紛争後における民族共生構築に向けた教育の段階的アプローチ
20. 武　寛子（神戸大学大学院）　中学校におけるシティズンシップ教育- 日本とスウェーデンの国際比較-
21. 西尾　理（兵庫教育大学連合大学院）　ユーゴ内戦の教材化- 人道的介入を中心に-
22. 居城勝彦（東京学芸大学附属竹早中学校）　国際理解教育の視点を生かした中学校音楽科カリキュラム試案
23. 井ノ口貴史（京都橘大学）　高校世界史におけるアフリカ史のカリキュラム開発- 同時代史的視点にたった教材開発を志向して-
24. 青山晴美（愛知学泉短期大学）　オーストラリア観光産業におけるアボリジニ文化の表象
25. 橋崎頼子（神戸大学大学院）　多元的シティズンシップを育成するカリキュラム構成原理- ヨーロッパ評議会のLiving in Democracy を手がかりに-
26. 小嶋祐司郎（広島県大竹市立栗谷中学校）　国際理解教育の新しい学びを創る- 国民国家の揺らぎと教育現場-
27. 森川与志夫（奈良県立法隆寺国際高校）　マイノリティの生徒に対する教育支援-「ロールモデル」と協働-
28. 北山夕華（名古屋大学留学生センター）　シティズンシップ教育における多様性とナショナル・アイデンティティ- スコットランドとイングランドのシティズンシップ教育の比較から-
29. 鶴見陽子（中央大学大学院）　中国の多元文化教育に見る「多様性と統一」- 北京市における民族団結教育の理論及び実践から-
30. 永田佳之（聖心女子大学）　ESD による価値観・態度・ライフスタイルの変容：カンガルー島スタディツアーを通したフィールドスタディーズの試み
31. 金　悦子（Angel world 主宰）「異文化理解教育」への提言- 多言語と人形を使った実践報告に見る「個性」の共存-
32. 中澤静男（奈良市教育委員会）　世界遺産教育における教育委員会の役割
33. 祐岡武志（奈良県立法隆寺国際高校）　世界遺産教育を通した生徒の変化
34. 山田幸生・中島大輔（香芝市立鎌田小学校）　博物館アウトリーチ教材の開発と実践- マレーシアにおける評価を中心として-
35. 手嶋將博（文教大学）　シティズンシップ教育をめぐるアジアの動向- マレーシアの取り組みを中心として-
36. 佃　繁（プール学院大学）　変則的言説としての国際理解- リオタールへのローティの応答にもとづいて-
37. 風巻　浩（神奈川県立麻生高校）　ウガンダと日本を結ぶ「希望」と「平和」の授業ー「対話的学びのネットワーク」の考察
38. 山中信幸（柳学園中・高校）　学校教育において”わかる”を社会参加につなげるファシリテーターの役割とその可能性- 開発教育からのアプローチ-
39. 今田晃一（文教大学）　インターネットを用いた博物館事前・事後研修の在り方- 国立民族学博物館のweb ページ情報を事例として-
40. 松原　久（京都府立園部高校）　国際理解教育における国際問題学習の課題- 高等学校国際関係学科設置校における「北方領土教育」の実践例を通して-
41. 吉成佑美（上越教育大学大学院）　国際理解教育における起業家教育の活用に関する研究
42. 丸山英樹（国立教育政策研究所）　ESD と「学力」
43. 梅野正信（上越教育大学）　判決書を活用した人権教育としての市民育成教育に関する日韓の授業研究(1) 電子掲示板における名誉毀損事件
44. 吉田直子（青山学院大学大学院）　対立解決教育(Conflict Resolution Education) の意義と課題-「他者理解」の観点から-
45. 小松和平（上越教育大学大学院）　国際理解教育における効果的な出前授業の在り方に関する研究- ユネスコ活動のスタディツアーに着目して-
46. 曽我幸代（聖心女子大学大学院）　大学とESD- 大学を取り巻く持続不可能性-
47. 田島弘司（上越教育大学）　質的分析用PC ソフトを活用した国際理解教育の授業の分析の試み
48. 釜田　聡・許　信恵（上越教育大学・韓国漢南大学）　持続発展教育（ESD）と日韓相互理解のための教育
49. 野中春樹（広島なぎさ中・高校）　変化の可能性を信じることができる生徒を育てる-「人間科」を中心とした国際理解教育の実践と課題-
50. 石川洋一（実践女子大学）　多文化共生と複言語主義についての一考察
51. 宮野祥子（早稲田大学大学院）　多文化共生の実現へ向けた地域日本語教育の可能性- 国際理解教育からの視点-
52. 水野涼子（聖心女子大学大学院）　正の循環・負の連鎖からのつながりを考える- ラオス・タイのスタディツアーから生まれた教材-
53. 服部圭子（近畿大学）　地域日本語ボランティアの不安と気づき- 養成講座の充実に向けて-
54. 磯田三津子（京都橘大学）　雑種（ハイブリッド）音楽の創造過程にみる多文化共生- 京都東九条マダンの演目「和太鼓＆サムルノリ」の教材化にむけて-
55. 福元千鶴（鹿児島県立鹿児島東高校）　シンガポールの教科書から国際理解を考える- 第 2 次世界大戦授業実践を通して-
56. 小関一也（常磐大学）　ESD におけるグローバル・シティズンシップ
57. 栗山丈弘（文化女子大学）　新しい「相互依存」教材の開発に向けて
58. 伊井直比呂（大阪教育大学附属高等学校池田校舎）　アジア・北欧7 カ国の高校生による「持続可能な社会への提案」- アジア・北欧7 カ国高校生国際会議から-
59. 安家紀子・金　生遵（豊中市教育委員会）　地域で創る“子どもから出発する豊中型ESD”- 文部科学省・国際教育推進プランより-
60. 小林　亮（玉川大学）　ESD 推進における高等教育の役割
61. 上別府隆男（東京女学館大学）　高等教育交流における国際理解教育の位置づけ
62. 中山あおい（大阪教育大学）　シティズンシップ教育をめぐるヨーロッパの動向- 欧州評議会とEU の取り組みについて-
63. 嶺井明子（筑波大学）　ロシアのシティズンシップ教育におけるパトリオティズム
64. 藤崎隆博（鹿児島大学大学院）　子どもの「社会参画」の力を育てる国際理解教育のカリキュラム開発に関する研究
65. 木村真冬（お茶の水女子大学附属中学校）　多様化する帰国生への支援のあり方- お茶の水女子大学附属中学校の取り組み-
66. 岡崎　裕（プール学院大学）　グローバル時代におけるローカルシチズンシップ
67. 石森広美（宮城県立仙台東高等学校）　グローバルシティズン再考ー高校での現場からー

韓国国際理解教育学会大会の報告

外国語教育をテーマにした実りあるテジョン大会

文化女子大学　栗山　丈弘

開催地のテジョン市へ

2008年11月8～9日、第9回韓国国際理解教育学会がテジョン市の忠南国立大学にて開催された。日本からは9名の会員が参加した。

私は昨年のトンヨン大会に続き参加した。トンヨンはプサンからバスで2時間余りの遠路だった。「来年はソウルの近く」ときいていたがテジョンもまた、仁川空港から3時間ほどバスに揺られての小旅行であった。車窓から夕日に染まる紅葉を楽しみ、すっかり日が暮れた頃テジョンに着いた。

日本からの参加者は、前日の夜の歓迎レセプションで顔を合わせた。予定通りに集合はできず、韓会長や関係者の方に気をもませてしまったものの、あたたかく出迎えていただき韓国式日本料理をおいしくいただいた。

基調講演

今大会のテーマは、“English Language Education, Cultural Imperialism and EIU”すなわち「英語教育、文化帝国主義と国際理解教育」と、とても刺激的だ。

基調講演は、日本の文部科学大臣、総理大臣にあたる要職を歴任されたイ・ヘチャン氏が「北東アジアの平和共同体に向かって」と題してご講演された。世界の共通語としての英語をどう受け入れ、教育していくかが大切と述べるとともに、英語だけでなく、北東アジアの言語や価値観を互いに学ぶことの重要性を指摘し、北東アジアの平和共同体の構築する時期に来ていると語られた。

外国語教育に関する討論

先のテーマのもと、シンポジウム(8日午前)とワークショップ(9日午前)が実施された。

シンポジウムでは、日本から寺島隆吉会員が「日本における国際理解教育と英語教育」について、英語力＝国際競争力とはならないことを、アメリカなどの事例を交えて報告された。イ・ピョンミン氏(ソウル大学)は韓国での外国語教育の基礎となっているチョムスキーの理論の限界を示し、社会文化的な要素を取り入れることの重要性を示唆した。また中国のシュウ・シナン氏(ハルピン工業大学)は、中国の高等教育における国際理解教育の現状を、チュン・セイヨン氏(忠南国立大学)は、「国際理解教育から見た外国語教育問題」と題して報告された。

イ・ヘチャン元国務総理(前列右から2人目)と日本人参加者

APCEIU会長主催のレセプション(左から3番目が筆者)

ワークショップでは、服部圭子会員が国際理解教育の視点にたった英語教育として、アジアで英語を学ぶ子どもたちの交流などのアイデアを提案した。ユ・チュル氏(忠清北道教育庁)は英語教育普及の現状や課題を述べた。シュウ氏はハルピン工業大学での中国高等教育での英語教育の現状や課題について報告され、熱心な討論が行われた。英語教育に力を入れだした三カ国の現状と課題が浮かび上がる有意義な場となった。

自由研究発表

8日の午後からは自由研究発表が行われた。私は日韓中教材開発ワークショップの「食」グループの成果である「ラーメン」の実践結果を報告した。同ワークショップの関連としては、森茂岳雄会員、中山京子会員、服部圭子会員による「移民」グループの成果が発表された。日本と韓国での学会の度に、成果が前進していることを実感でき刺激を受ける。石川祥一会員は外国語教育、釜田聡会員は歴史教育に関するテーマで研究成果を発表された。

温泉での一コマ

開催地のテジョンは温泉地としても有名だ。早朝、ホテルの大浴場で疲れを癒していると、ご老人が声をかけてきた。「お湯…アツイ？」片言だが日本語だ。植民地時代に覚えた日本語だろう。この温泉は日本人が開発したものだよと教えてくれる。彼の言葉を私が理解できると満足そうに微笑んだ。些細な会話であったが、心の距離がぐっと縮まるのを実感した体験だった。

2日間の大会の最後に、韓敬九会長がおっしゃった言葉が印象的だ。「言葉を学ぶということは、もう1つの世界に出会うことだ」と。来年、京都大会での再会を約束し帰国の途に着いた。

最後に、韓会長をはじめ学会関係者の方々、APCEIU関係者の方々に、心よりお礼を申し上げたい。

国際理解教育研修会の報告

東京研修会

小学校と大学が連携した「鯨学習」

桜美林大学　高橋　順一

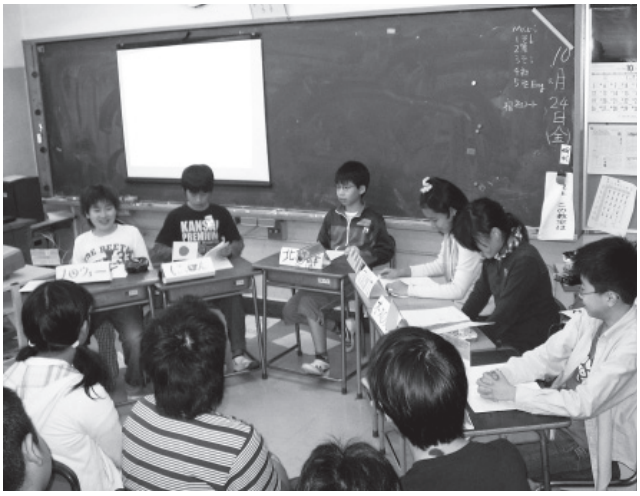
「捕鯨問題」という言葉とともに、鯨が地球規模の環境保全の主張とともに語られるようになって、既に35年以上経っている。日本は、数千年にも及ぶ鯨の持続的利用の歴史を持ち、さらに世界最大規模の捕鯨産業を発達させた国として、この問題には無関心ではいられないはずだ。21世紀に入り、環境観は1970年代の単純なものに比べて大きく深化発展しており、ESDという新しい世界規模での教育的取り組みも始まった。しかし鯨と捕鯨の問題は、学校教育ではあまり熱心に取り組まれてはいないようである。その理由のひとつは、問題が政治化され過ぎていること、そしてもうひとつは、あまりに相互に対立矛盾する情報が入り交じっているため何を信用したらよいのかよく分からないということのようだ。

■ 小学校と大学との連携

そこで我々は、大学が学校と連携することによって信頼性の高い情報と教材資料を提供し、学校に鯨学習を実施しやすい環境（情報および教材資料）を整えることを試みた。学習活動実践校は、東京都板橋区志村小学校。連携協力機関は、桜美林大学草の根国際理解教育支援プロジェクトである。

多田孝志会長の紹介で、志村小の小澤校長および学習活動を実施する6年生担当の2人の先生と最初の会合を持って構想を話し合ったのが5月9日。学校の諸行事とのかねあいから、子供たちの鯨学習活動は、10月に2～3週間集中的に行うことになり、研究成果の発表は10月24日に予定されている授業公開の場で行うことに決まった。

その後双方の時間の都合がつく金曜日を中心に夏休みまでに3回ほどの打ち合わせを小学校で行った。最初は、先生方から多くの質問や提案を出してもらい、それに対して私からは情報の提供や助言を行った。その間、先生方は子供たちのインターネット学習のための事前調査として、有益な情報を提供するサイトと望ましくないサイトのチェックを行い、私は教師のための文献資料の収集整理を行った。夏休み中には、一人の先生が日本鯨類研究所（東京都中央区豊海）を訪問して、必要な情報や資料の提供を受けた。最初の段階から、学習活動の計画立案および指導はすべて担当の先生方の手で行われ、大学の役割は、必要な情報と教育資料の提供に留められた。10月になると、学習活動の方向ははっきりとし、子供たちは小グループに分かれてそれぞれのテーマで研究が進んだ。私の方からは、スーツケースに入れた実物資料（鯨の歯、髭、骨等の素材と加工製品、鯨意匠の郷土玩具、それに多様な鯨種や鯨体各部位を示したポスター等）をハンズオン教材として学校に提供した。



志村小学校の「国際捕鯨委員会」
捕鯨賛成国と反対国に分かれて子供たちが激論

自作紙芝居「シロナガスクジラの一生」を演じる
志村小学校の児童たち

■ 子どもたちの表情に見られた活動の成果

研究発表の場には、米田前会長をはじめ、多田、森茂、中山、若井、栗山、それに私と、会員7名が参加。他にも、学校評議員、保護者や近隣住民等、大勢の見学者があった。子供たちは8つの班に分かれてそれぞれの研究成果を発表した。そのトピックをいくつか挙げると、「いろいろなクジラ」、「くじらの歴史へGO」、「（模擬）国際捕鯨委員会」、「生態系を知る」、「クジラの解体新書」、等である。それぞれプレゼンテーションに工夫をこらしての熱演であった。中には、かなりレベルの高い生態系の理解や、国際関係の把握もあり、小学6年生が自主的に行った研究成果として非常に優れたものであった。発表を終えた子供たちの顔には満足感が見て取れた。今回のくじら学習成功の最大の理由は、子供たちの自発的な学習を、あせらず無理強いせず、ゆとりを持って後押ししてきた担当の先生方の努力にあることは無論であるが、連携パートナーの大学としても半年間継続して支援できたことに喜びを感じている。大学との連携があってはじめて実現できた教育活動であったと思う。

奈良研修会

「78名が参加した香芝市での催し」

文教大学 今田　晃一

中谷彪香芝市教育長の開会挨拶

■教育委員会との連携による研修会開催

2009年2月21日（土）に奈良県香芝市の中央公民館において，本学会の15回目となる実践研修会が開催されました。今回の研修会の特徴は，香芝市教育委員会との連携です。今年度4月に香芝市教育長として赴任された中谷彪先生は，教育行政が専門の元大阪教育大学の学長であり，国際理解教育にも大きな関心をもたれていました。それがちょうど昨年度の9月に文部科学省「国際理解教育実践事例集・中学校および高等学校編（教育出版）」が新しく発刊され，そこに香芝市の事例が掲載されているということ。また来年度発行予定の同事例集の小学校編にも同様に香芝市の実践事例が掲載予定であり，香芝市は国際理解教育の実践においては注目されている地であること。そしてその実践が，森茂岳雄常任理事が中心となって進めている本学会と国立民族学博物館との博学連携事業から発展したものであること。さらに多田孝志会長が，市町村単位での国際理解教育の充実を模索されていたことなどが，タイミングよくつながり，一気に実現のはこびとなりました。当日は事例集掲載の3つの事例報告とマレーシア工科大学のクマラグル・ラマヤ先生の多民族国家マレーシアにおける国際理解教育の現状についての講演会の2部構成で実施されました。参加者は，香芝市の幼稚園・小学校・中学校の先生方を中心に78名であり，今年6月に京都（同志社女子大学・実行委員長：藤原孝章常任理事）で行われます本学会の第19回研究大会への大きなステップとなりました。

■研修会での活動の概要

開会挨拶　　香芝市教育委員会教育長　中谷彪

第1部実践事例報告（司会　文教大学 今田晃一）

事例報告1　「青い目の人形をさがせプロジェクト～地域から見つめる過去と未来の国際親善」　千葉市立打瀬中学校　青木一

講評　文教大学 手嶋將博

事例報告2　「国立民族学博物館との博学連携実践：文化祭でミニ博物館をつくろう～感じて，つくって，考えよう」　立命館守山中学校・前香芝市立香芝西中学校　木村慶太

事例報告3　「国立民族学博物館との博学連携実践：博物館アウトリーチ教材の開発とマレーシアでの実践」　香芝市立鎌田小学校　山田幸生・中島大輔

講評　中央大学：森茂岳雄

第2部　講演会「多民族国家マレーシアにおける国際理解教育の現状と課題」マレーシア工科大学人間開発学部　クマラグル・ラマヤ氏

■21世紀型の学習論・学力論を模索

参加者の感想は，「文部科学省の事例集等は発行してそれで終わりがほとんどだが，このように事例集をどう活用するかの研修は有意義である」「マレーシアのクマラグル先生は当日の講演だけでなく，前日には鎌田小学校で子どもたちが作ったアウトリーチ教材のマレーシアでの反応をきちんと伝えに来られている。この学会のキーワードは，『つながりを大切にする』ことであることがよくわかった」等，概ね好評であった。閉会の挨拶で多田会長には，「今後は20世紀の細分化主義ではなく，様々なものをつなげ，新しいものを発見したり，創造したりすることが大切であり，本日の研修会の議論は，まさしく21世紀型の学習論・学力論に通じるものであり，心地よい疲労感をみなさんと共有できてうれしかった」と締めくくっていただいた。

青木一会員による「青い目の人形」の実践報告

2008年度理事会（各委員会等）報告

研究委員会より

中央大学　森茂　岳雄

1.報告：「特定課題研究プロジェクト」の活動報告と今後の予定

研究委員会では、2007～2009年度の共通の研究テーマを「共生社会の構築と国際理解教育」とし、その下に担当理事を中心に現在三つのプロジェクトを並行して走らせ研究を行っている。各プロジェクトは、順次年度毎に公開研究会やワークショップ、オープンフォーラム等を通して研究成果を積み上げ、最終的に研究大会時に特定課題研究としてその成果を公開し、それを学会紀要『国際理解教育』に特集としてまとめることになっている。各プロジェクトのテーマとこれまでの活動報告及び今後の予定は次の通りである。

(1)「ユネスコの世界遺産教育と日本の国際理解教育」(担当理事：田淵五十生)

2008年2月23日（土）公開研究会「世界遺産から持続可能な社会の実現へ」（於奈良教育大学）

2008年6月15日（日）特定課題研究「ユネスコの動向を踏まえた日本の国際理解教育—世界遺産教育を切り口としたESD－」（於富山大学）

2009年6月『国際理解教育』Vol.15で「特集」（編集中）

(2)「ことばと国際理解教育」(担当理事：山西優二)

2008年4月19日（日）オープンフォーラム「ことばと国際理解教育—ことばの文化性・身体性・音の力－」（於早稲田大学）

2008年6月14日（日）特定課題研究「ことばと国際理解教育」（予定）（於同志社女子大学）

2009年6月『国際理解教育』Vol.16で「特集」（予定）

(3)「グローバル時代のシティズンシップと国際理解教育」(担当理事：嶺井明子)

2009年度　オープンフォーラム等（予定）

2010年　研究大会　特定課題研究「グローバル時代のシティズンシップと国際理解教育」（予定）

2011年　『国際理解教育』Vol.17で「特集」（予定）

2.審議：2009年度以降開始「特定課題研究プロジェクト」について

(1) については、今年度で終了となるため、2009年度から始まる新規プロジェクトについて1月31日開催の理事会で審議し、次のような方針を決定した。

①引き続き共通研究テーマを「共生社会の構築と国際理解教育」とする。今後テーマにある「共生社会」について、各プロジェクトチームで議論し共通認識を作っていく。そのために。プロジェクト間の連絡を密にしていく。

②新規プロジェクトに関しては、理事をメンバーに含めるかたちで募集する。

紀要編集委員会より

同志社大学　藤原　孝章

現在（2009年2月）、第15号の編集作業中です。今回は、投稿論文が24本（内訳は、実践研究7、研究論文15、研究ノート2）と大変多くありました（昨年度は16本の投稿）。年々、研究、実践への取組みの成果を見ることができるのは編集委員会として望外の喜びです。しかし、全体のページ数の関係から、掲載本数が限られてしまうのは残念です。編集委員会としては慎重かつ丁寧な査読と改善へのコメントを心がけておりますが、惜しくも掲載に至らなかった会員の皆様には次号にもチャレンジして投稿をお願いする次第です。

第15号から学会紀要には大きな変化がみられます。それは、学会の特定課題研究に対応した特集論文の掲載です。第15号では「世界遺産教育と国際理解教育」として、1つの実践論文と2つの研究論文を掲載することになりました。今回は、博学連携の教育研修で本学会と協働している国立民族学博物館の中牧弘允先生に、文化資源の観点から世界遺産教育についての論文をいただきました。中牧先生には、非学会員であるにもかかわらず、快く論文執筆の労を引き受けていただきましたこと、この場を借りて編集委員会からお礼を申し述べさせていただきます。

次号（16号）のテーマは、「ことばと国際理解教育」です。会員の皆様にも特集論文での投稿論文も受け付けておりますので、自由投稿とあわせてご準備ください。本年（2009年）6月中旬（13、14日）に開催されます京都大会（同志社女子大学京田辺キャンパス）において口頭発表をしていただき、意見を交換して、投稿論文にまとめていただければありがたいです。

なお、第16号の投稿応募の〆切については、15号と同様、京都大会終了後1ヶ月後の7月20日頃を目処に投稿応募申込の締め切りとしておりますので、ご留意いただきますようお願いいたします。

理事会より

学会事務局長（目白大学）中山　博夫

今年度2回目の理事会が、1月31日に中央大学駿河台記念館で開かれ、多田孝志会長、大津和子副会長を始め14名の理事に事務局2名を含めた16名が出席しました。

理事会では、研究プロジェクトに関する議論がなされました。現在、3本のプロジェクトが進行しています。田渕理事を中心とした「ユネスコの世界遺産教育と国際理解教育」、山西理事を中心とした「ことばと国際理解教育」、嶺井理事を中心とした「グルーバル時代のシティズンシップと国際理解教育」です。できるだけ多くの会員の参加を得て、充実した研究にする方向を確認しました。各プロジェクトの詳細は学会ＨＰに順次掲載しています。

学会紀要への投稿規定についても話し合われました。これまでも多種多様な論文が投稿されてきましたが、近年、国際理解教育といえなくもないといった論文の投稿が増えてきたため、「国際理解教育に関するもの」と明記して投稿の条件に入れることになりました。

第19回研究大会の実行委員長である藤原理事からは、研究大会の準備状況が報告されました。韓国学会、ＡＰＣＥＩＵ（アジア・太平洋国際理解教育センター）からのゲストも招き、一般会員120名、学生会員20名ほどの参加を見込んで準備が順調に進んでいます。

また、田渕理事から、第2回世界遺産学習会が347名の参加者を得て盛会であったとの報告がありました。今田理事からは、第15回実践研究会（香芝市）開催の案内がされました。大津副会長からは昨年10月に参加した韓国学会の報告がなされました。

新入会員の入会が審議され承認を受けました。今期も数多くの会員が入会しています。なお第20回大会会場は、聖心女子大学が候補大学となりました。

国際理解教育の新潮流

副読本『奈良大好き世界遺産学習』作成の熱い取り組み

奈良市教育委員会　中澤　静男

「この副読本には、熱意がありません。何を伝えたいのかがまるでないのです。この副読本を子ども達に使わせるのはやめてください。」

2007年5月25日に開催した第1回新しい世界遺産学習構築のための検討委員会（以下検討委員会）での西山副委員長（奈良国立博物館学芸部長）の発言が、新しい副読本『奈良大好き世界遺産学習』作成の始まりだった。「古都奈良の文化財」が世界遺産に登録されたのを機に、奈良市教育委員会では2002年に副読本『世界遺産のあるまち奈良』を刊行していた。今回新しい世界遺産学習を構築するにあたり、若干の修正は考えていたが、全面改訂になるとは予想もしていなかった。熱意のこもった副読本を作成するにはどうしたらよいか、それが大きな問題であった。

奈良の良さを副読本で学習中

副読本に熱意を！

新しい副読本は3部構成にすることにした。第1部に「奈良には本当にすばらしいものがある」をテーマに、感動的なストーリーを記載することにした。資料を読み漁ったり、熱い心の持ち主から聞いたりして、感動的な物語を集めた。

第2部は「古都奈良の文化財」を構成する8つの資産群の紹介である。単なる観光ガイドとは一線を画し、熱意をこめるにはどうしたらよいかと思い悩んだ末、「人は人に感動するものだ」と結論づけ、人物の働きや奈良の人との関わりに焦点化して記述した。

熱意のある副読本は熱意のある仲間から

第3部は「世界遺産からＥＳＤへ」をテーマとした、新しい学習モデルの紹介である。しかし2007年当時、ＥＳＤを知る奈良の教員は皆無であった。早速、やる気のある小中学校の教員12名を集め、プロジェクトチームを編成した。しかし、皆、意欲はあるのだがＥＳＤが何かがわからない。そこで、地域遺産・国際理解・人権・平和等のテーマについては奈良教育大学の田渕教授（検討委員会委員長）に、環境教育には同じく奈良教育大学の森本教授（検討委員）につきっきりで指導をしていただき、学習モデルの作成に挑んだ。指導案を書いては修正を加え、実際の授業に落とし込んでいく。子どもの動きや感想から、また修正する。奈良公園に出向いて、その季節その行事でしか撮影できない写真を撮影する。このようなプロジェクトチームの会合を月一回のペースで開催した。学校終了後の6時から深夜まで、奈良名物大仏あんぱんをかじりながら、熱い討論が重ねられた。

プロジェクトチームを組織して福読本づくり

「やる気があるのはわかるが、予算もないだろう。半年で作成なんて所詮無理な話だ。」

周りは否定的な意見ばかりであったが、突き進めば道は開けていく。まず、世界遺産教育をテーマとした田渕の研究が日本学術振興会科学研究費補助金に採用され、副読本作成資金の目途がたった。また奈良を撮り続けた写真家である故入江泰吉氏の写真を、奈良市写真美術館で学芸員をしている友達が無料で提供してくれたほか、作成意図に共感した取材先の方が、提供してくださったりした。

熱い志の仲間と幸運に恵まれ、副読本作成は最終段階の校正に入った。田渕と西山、そして私の3人が博物館学芸部長室にこもり、一言一句を検討していった。一文字消しては、こちらで一文字加える。もっとよい表現を模索する。長い苦しい戦いだった。

予定より3ヶ月遅れたが、副読本『奈良大好き世界遺産学習』が完成した。現在奈良市立小学校5年生～中学校3年生が、その副読本で学んでくれている。数年先、奈良の子どもは全員奈良が好きになり、持続可能な社会の担い手になっている。その日が今から楽しみである。

会員だより

環日本海域小学校授業交流を続けて

上越教育大学　　瀬戸　健

ゲームを楽しむ子どもたち

富山大学人間発達科学部附属小学校では、平成15年度から環日本海域に位置する韓国、中国、ロシアの大学附属学校との授業交流を重ねている。すでに、14回を数える。

その特徴は、同校とそれぞれの国の教師とが互いに教材を持って日本海を渡り、相手国の児童を借りて授業をする「飛び込み授業」の交流だということである。昨年末、同校教諭沼崎信行先生の大連海事大学付属学校での授業に同行させてもらった。

異国で授業をするのは、授業者にとってとてつもなく大きなプレッシャーとなる。その最大の理由は、言語である。通訳がつくとはいうものの、言葉が通じない状況を想定して授業作りをする。余計なものをできるだけ削ぎ落とし、授業を成り立たせる本質的なものだけをクリアに描き出すことが必要になる。

沼崎先生が選んだのは、3年生体育のタグラグビーの用具を使ったゲームであった。一学級56人の児童の腰にタグを付けさせ、それを互いに取り合うゲームから始める。できるようになると、今度はテニスボールを持たせ、相手の陣地を駆け抜けさせてゴールするというチームゲームへ変化させていく。もちろん、相手陣内でタグを取られると、スタートに戻らねばならない。子どもたちはゲームの面白さに心を奪われ、汗だくになり、しかし、にこやかな表情で走り回るようになっていく。

授業を終えて授業者はいう。「子どもの動きから、授業観の違いがビンビン伝わってくる」「しかし、子どもたちの学びたい気持ち、教師の学ばせたい気持ちは変わらない。本質的なものは、必ず受け取ってもらえる」と。

中国では、教師を成長の「工具」という。工具が確実に働くように、教師が子どもの可能性を確実に拓くからであろうか。一斉指導という共通点をもつ我が国と中国の学校、この交流を通して互いが学び、確かめ合って、それぞれがよりよい「工具」となる。その過程を今後も追いかけてみたい。

祈りを通した国際理解教育

福岡県立福岡高校　鹿野　敬文

「怒りのヒロシマ」「祈りのナガサキ」と形容される世界に2ヶ所しかない被爆都市。残念ながら、両方とも日本にあります。

今から20年以上も前のことです。軍縮に関する専門家の長期研修の一環として、若手外交官（国連軍縮フェロー）が世界各国から大挙して長崎に来たことがあります。研修プログラムの中に、被爆の惨禍から見事に復興した学校への訪問を入れたいということで、ある学校が候補に挙がりました。その学校では来られる国を分担して、各クラスで国旗を作ったり、国歌を覚えたりで大わらわ。挨拶も相手の言葉でするのですから。

訪問当日は、被爆時及び被爆後に学校が置かれた辛く厳しい状況についての説明がゆっくりと、そして静かにされました。その後、各外交官は自分の国を担当するクラスに招かれました。型どおりの交流の後、お別れをする前に、クラス全員の生徒が外交官の出身国の平穏を願う祈りを捧げました。悲惨な過去を持つ被爆地の高校生からそのような祈りを受けるとは予想もしていなかったため、各外交官は本当に驚かれました。

学校を去られるとき、ハンガリーの外交官は「被爆の悲惨さは勿論ですが、あの祈りの時間は自分にとって忘れ難いものとなりました。自分の祖国の平和を心から祈ってくれる若者が長崎にいるとは。自分は軍縮という極めて難しい問題を扱っているため、時には押し潰されそうになります。でも、ここで励ましとエネルギーをもらいました。本当に有り難うございました。」と言われました。

多くの日本人が忘れてしまったことに、「手をあわせて祈る」という行為があります。しかし、このことが言葉以上に国際親善に貢献することがあるのです。日本の国際理解教育があまり気づいていない一つの重要な側面ではないでしょうか。

世界各地で捧げられている敬虔な祈りの姿を見るたびに、私はあのときのことを思い出します。

祈りの結晶 ー長崎県の上五島にある教会ー
（左側が筆者）

一枚板ではないドイツの「過去の克服」

筑波大学　柴田　政子

外国人学生向けのニュルンベルク・スタディー・ツアー前のセミナー
（バイロイト大学にて）

教室外の歴史教育というテーマで、第二次世界大戦に関する博物館や資料館を訪ねている。2007年夏には、ドイツ・バイエルン州にあるバイロイト大学を拠点に調査をした。夏のバイロイトと言えば音楽祭。が、「半永久に売切」のチケットはもとより一縷の望みもかけず調査に勤しめた。

ドイツには、ナチスの歴史に関連する情報公開をしている資料館の類が200ヶ所以上ある。うち145ヶ所は旧西独にあり、東西格差は歴史政策にも顕著である。しかしその西側も、「過去の克服」への取り組みという点では地域差がある。キリスト教社会同盟が地盤とし、政治的・文化的「保守州」とされるバイエルンでの取り組みは比較的遅い。ナチスが当時新進気鋭の映画監督レニ・リーフェンシュタールを大抜擢し撮らせた「意志の勝利」に収められたかの党大会は同州ニュルンベルク市で行われており、ここは「ドイツ人の血と名誉保護のための法律」、いわゆるニュルンベルク法発祥の地でもある。

またバイロイトは、現在でもイスラエルでの演奏はブーイングを浴びるワーグナーとその一族所縁の地である。州内随一の保養地ベルヒテスガーデンは、ヒトラーが山荘を築きベルリンに次ぐ第二の政権拠点ともした。

こうした背景を持つバイエルンで、「過去の克服」に大きな変化が起こったのは近年のことである。1960年代からサッカー競技場案やショッピング・モール案で紛糾してきた党大会跡地は、漸く2001年にドキュメンテーション・センターとして、ナチスに関わる情報提供の場に落ち着いた。ベルヒテスガーデンに、ドキュメンテーション・オーバーザルツベルクが設立されたのは1999年で、フロッセンブルク強制収容所にいたっては公開展示は2007年以降のことである。

しかし、その動きは遅かったが緩やかではない。上記機関は、州教育省や歴史研究所の協力の下、現在では貴重な教育的役割を果たしていることも加筆したい。

先住民族に関する教育の重要性とそれをめぐる最近の出来事

―「先住民族の権利に関する国連宣言」、「二風谷宣言」、「先住民族の教育に関する世界大会」―

九州大学大学院生、熊本学園大学非常勤講師
ジェフ　ゲーマン

世界の先住民族は長い搾取と抑圧の歴史を有しており、現在でも環境破壊の負の影響を真っ先に受けている人々である。従って、先住民族を抱える国々と関係をもつ先進国はその状況を知る必要がある。一方で、先住民族は自らの将来を決定する自己決定権を求めており、20年間の努力の末ついに2007年9月13日の「先住民族の権利に関する国連宣言」の採択にこぎつけた。この権利宣言の実施を訴えるため、アイヌのNGOは北海道洞爺湖サミットに先立ち、11ヶ国、27人の先住民族代表を北海道の平取町と札幌に招き、「先住民族サミットアイヌモシリ2008」を開催、「二風谷宣言」および「日本政府への提言」を作成発表している。そのうち「二風谷宣言」は「先住民族の権利宣言」に関する学習を公教育に盛り込むべきという条項も入っている。

一方、サミットに先立ち、衆参両院は2008年6月6日をもって「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」を全会一致で採択し、これを受けて「アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会」が設置され、2009年には具体的な提言が出される予定である。この懇談会の第二回会合に向けて、アイヌ民族最大の代表組織、「北海道ウタリ協会」はその教育権を強く打ち出した要望書を提出している。これらの動きに共感し、昨年12月アイヌ民族4人の一行はメルボルンへ出向き、第8回「先住民族の教育に関する世界大会」へ出席した。筆者も先住民族サミットの国際部共同担当であり、又メルボルンの会議の同行通訳をつとめた。

海外の多くの先住民族研究が示しているように、アイヌ語をはじめとするアイヌの人々の知識を基礎に据えたカリキュラムや「民族教育」の充実を通して初めて民族存立は確固たるものになる。真の異文化理解教育もまず民族の言語や知識を尊重するところから出発することはいうまでもない。これらの教育分野における先住民政策の発展を強く望むところである。

メルボルンで開催された「先住民族の教育に関する世界大会」の閉会式後のアイヌ一行。左から二人目はアボリジニの女性、四人目はメルボルン在住のアイヌ長谷川由希氏

富山大会での経験

大阪府茨木市立葦原小学校
八代　健志

富山大会（2008年6月13・14日）に初参加の感想を記すことをお許し下さい。私の発表内容は、社会教育でアウトリーチ教材「みんぱっく」（国立民族学博物館）を使った実践が、人権教育としてどのように評価できるかでした。この研究に自信なく、詳述しません。その場で先輩の皆さんに温かい指導を頂いた事を感謝申し上げます。

参加して、私に大変大きな意味があった経験について書きます。司会団のお一人X先生が、私の発表分科会の開始前、私のところに近寄って来られました。「つまらない発表だったら許さないよ、…」と言わんばかりの迫力でした。しかし開口一番、「先生のお名前はや・し・ろ・た・け・し、とお読みしてよろしいのですか？」と、とても優しい口調で丁寧にお尋ね下さいました。いわば「ペーペー」の私に対し、学会での実績の大きい立派な先生が丁寧に質問下さったわけです。

私はこれまでの人生で氏名（姓も、名も！）を誤らず呼ばれたことがあまりありません。勝手な命名をされたまま何年間も出張招請状が届き続ける、というひどい例さえ経験しています。ただ、ここでその種の間違いについて、とやかく言うつもりはなく、何に心を動かされたかを言いたいのです。異文化理解とは何か？私は、それは相手の考え、立場、ありようを、まずそのまま認め、受け止めることからしか始まらない、と常々考えています。X先生は、事も無げに行動で「他者尊重、基本のき」を示された。その自然さこそ、本学会に集う諸先輩が、これまで国際理解教育の質的向上量的拡大に於いて「人間同士が真っ当につながり合うことの大切さ」をどこまでも真摯に希求されてきたことの証明のように感じました。

みんぱっく実践で：大阪の宵の口の気温は、厳冬期でもせいぜい摂氏２～３度でしょうが、イヌイットの毛皮服を着て戸外へ出ました。「暖かい」というより「自然な感じ」という感想でした。

私は遠く及ばないのですが、是非ここで多く学ばせて頂きたいと心から思いました。X先生のお名前はわざわざ出しません、「当たり前のことですから・・・」とおっしゃりそうなので。

日本留学の意味

日本大学大学院文学研究科・博士後期課程
Bayasgalan Oyuntsetseg

モンゴルの小学校で（後列左端が筆者）

モンゴルの学校における道徳教育の歴史、現状、課題、教育方法、将来展望について総合的に研究しています。いまモンゴルでは、多様な価値観が混在する中で，子供を取り巻く環境が著しく変化し，教育の在り方にも根本的な見直しが求められています。私は，モンゴル国立大学に在学中，モンゴル国女性連盟の活動を通じて，子供の最も身近な環境である家庭が，子供の道徳性の育成の面で必ずしもうまく機能していないことに危惧を感じるようになりました。その当時，モンゴルは社会主義体制から自由経済主義へ移行しはじめた時代でした。

そこで大学院の博士前期課程で，家族機能の低下や青少年の道徳意識の希薄化が懸念されているモンゴル国の社会問題を考える一つの試みとして，親の行動と青年の道徳性の発達との間にどのような関連があるのかについて心理学的方法で研究しました。研究を通じて，家庭だけではなく，学校教育の問題も強く感じるようになりました。知識を伝達する側面に偏り，社会規範の本質を理解したり，集団や社会との関わりを大事にしたりする側面をおろそかにしていることを痛感したのです。そこで博士後期課程では、道徳教育の研究に取り組むことにしました。

歴史研究がまとまり、モンゴル国の現状に適合した道徳教育指導案の作成という実践研究の方向へ展開を始めました。その一環として、東京都板橋区の小中学校での授業参観、モンゴルの行政担当者へのインタビュー、教員へのアンケート調査を続けています。その傍ら、ボランティア講師として、「国際理解教育」の授業を区内の小中学校で行ってきました。

博士号取得後は、こうした経験や日本留学中に積み重ねた学術的知識を生かして、モンゴルの児童保護施設、児童教育センター、民間団体や道徳教育に熱心な先生方と協同で、私的な道徳教育研修会を立ち上げたいと考えています。

お知らせ －これからの行事／イベント案内－

国立民族学博物館・日本国際理解教育学会共催博学連携教員研修ワークショップ 2009 in みんぱく 「博物館を活用した国際理解教育」

国立民族学博物館との共催の博学連携の教員研修ワークショップも今年で５回目を迎えます。これまでに参加してくださった学会員の多くが、今ではワークショップを行う側として参加してくださるようになってきました。是非、異文化理解の宝庫であり、学びのワンダーランドである「みんぱく」でのワークショップにご参加下さい。一緒に「博物館を活用した国際理解教育」を考えてみませんか？

＜記＞

日　時：2009 年 8 月 4 日（火）10：30 ～ 16：00(予定)
場　所：国立民族学博物館　セミナー室（２階）および展示場
参加費：無料
趣　旨：国立民族学博物館を活用した国際理解教育の実践事例の紹介やミュージアムツアー、ワークショップを通して国際理解教育における博学連携の意義や可能性について考えます。
プログラム
＜第１部＞（午前）講演と民博研究者によるミュージアムツアー
＜第２部＞（午後）ワークショップ

寄贈図書

●寺島隆吉ほか『学習指導要領を読む視点』白澤社，2008 年
●藤原孝章「日本におけるシティズンシップ教育の可能性―試行的実践の検証を通して―」『同志社女子大学学術研究年報』第五十九巻，2008 年
●米山周作「『虹の国』へ～南アフリカ共和国を訪れて～」『学習院高等科紀要』、第５号別刷，2007 年
●米山周作「―カンボジアへ国連児童基金（UNICEF）の活動を通して―」『学習院高等科紀要』第６号別刷，2008 年

◆会員の図書・文献寄贈のお願い

会員の皆様の関わられました文献・図書・報告書・教材など、また、会員の所属する学校での紀要等がございましたら、学会にご寄贈ください。その際、助成金をいただいております公文国際奨学財団にも送らせていただきますので、できましたら２部お送りください。

◆紀要『国際理解教育』の購入手続きについて

現在、第１号を除き、最新の 14 号までの在庫がございますが、在庫が僅少の号も出始めております。学会ホームページにバックナンバーの総目次が掲載されています。ご希望の号数および冊数をファックスまたはＥメールで事務局までお知らせください。振り込み用紙をお送りいたします。なお、会員の皆様には、会員価格でお求めいただけます。

◆学会ホームページのご案内

研究大会やワークショップなどの情報をご覧いただけます。アドレスは次のとおりです。http://www.kokusairikai.com/

◆ニューズレター投稿のお願い

ひろく会員の皆様の活動をご紹介するために「会員だより」の欄を設けています。「会員だより」では、以下の条件で会員の投稿をお願いします。

内　容：現在の研究テーマや活動についてや国際理解に関する考え等
分　量：本文 800 字以内、写真（JPEG 形式、デジカメ写真）１枚

投稿をご希望する場合は、お名前、所属を明記の上、事前に以下までメールでご連絡ください。あらためて執筆のご依頼をさせて頂きます。投稿多数の場合には、調整させていただきます。

（連絡先）　田尻　信壹（富山大学）　stajiri@edu.u-toyama.ac.jp

事務局通信

新入会員

以下の 18 名の方が平成 21 年 1 月 31 日までに入会を承認されました。

氏　名	所　属	氏　名	所　属
寺尾　明人	日本ユネスコ協会連盟	齋藤　眞宏	旭川大学
小松　太郎	九州大学大学院	山本　勝治	東京学芸大学附属国際中等教育学校
伊藤　勝久	苫小牧駒澤大学	宋　隆美	延世大学教育学科
末永サンドラ輝美	太田市立太田小学校	高橋　洋行	横浜高等教育専門学校
五島　政一	国立教育政策研究所	南浦　涼介	広島大学大学院博士後期課程
金　　悦子		小林　茂子	中央大学
Myung-Hi, Synn	DEPARTMENT OF EDUCATION YONSEI UNIVERSITY	米澤　利明	横浜国立大学附属横浜中学校
杉山　維彦	イラン・イスラム共和国国営航空会社	小林　福太郎	品川区立小中一貫校　伊藤学園
米山　周作	学習院高等科	杉田　かおり	筑波大学大学院

事務局からのお願い

当学会において，平成 21 年は理事選挙の年にあたります。選挙に係る以下の 2 点，どうぞよろしくお願いいたします。

◆年会費納入のお願い

当学会の活動は会員の皆様の会費でまかなわれております。今年度までの年会費未納の会員は至急会費をお支払いくださいますよう宜しくお願いいたします。

・会費：正会員　：8,000 円
　　学生会員：4,000 円
　　団体会員：30,000 円
・郵便振り込み
　口座番号　　00120 － 5 － 801555
　加入者名　　日本国際理解教育学会

◆住所・所属等変更連絡のご協力をお願いします！

事務局からの郵送物が「転居先不明」で返送され、また、会員のみなさまへのご連絡が滞ってしまっている場合が少なからずあります。

所属変更によるお引っ越しなどで住所･所属等に変更がありましたら､ファックス（０３－５９９６－３１６６）または、Ｅメール（kokusai@mejiro.ac.jp）でお知らせください。また、会員種の変更もお知らせください。